様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年１２月２６日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号： 19520267
研究課題名（和文）ラーヴァーター以降の観相学に関するメディア論的研究

研究課題名（英文）Physiognomy after Lavater: A Mediatheoretical Approach

研究代表者
神尾　達之（KAMIO TATSUYUKI）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：60152849

研究成果の概要（和文）：
ラーヴァーターは学問の手前に位置していた観相学を学問に格上げしようとした。ラーヴァーターの観相学とその受容史を追うことで、次の二点を確認することができた。①学問がその条件として内包している客観的な観察という方法と、観察主体の透明性という前提は、近代の発明である。②観察主体が自覚しないままに自己特権化し、それを可能にするテクノロジーが開発されることによって、レヴィナスのいう「他者」の顔は隠蔽され続ける。

研究成果の概要（英文）：
Lavater tried to give the physiognomy which had not been a science the status of science. Surveying his physiognomy and its reception history, I came to the following conclusions. 1) The so-called objectivity of observation and the transparency of observer is an invention of modernity. 2) Because the physiognomist himself unconsciously privileged as an objective observers and the technology is developed for this purpose, the face of the “other” (Levinas) remains to be hidden.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：観相学、身体表象、ラーヴァーター、メディア論、文化学

１．研究開始当初の背景
①カルチュラル・スタディーズ：研究代表者は、平成 14-17 年度基盤研究(C)(2)「ドイツ文学研究とカルチュラル・スタディーズ」において、伝統的なドイツ文学研究と新興の Kulturwissenschaft との関係について考察した。目下、ドイツのみならず各国のドイツ文学研究において文化学の役割は大きくなりつつある。日本のドイツ文学研究も例外ではない。しかしながら、文化学が誕生したドイツとは異なり、日本では文化学がカルチュラル・スタディーズと明確に区別されておらず、文化学独自の方法論も欠けており、文化史的な背景に言及した研究が文化学として承認されてしまうのが現状である。日本の文化学の領域設定・方法・体系の確立と並んで、具体的な個別研究（ケース・スタディ）を積み重ねていくことが肝要だ、というのが、上述の研究において申請者が到達した結論の一つであった。観相学研究は、この個別研究

の一つとして構想されている。
②真理とヴェールの関係をめぐる表象：研究代表者は、メディア論の視点から、真理をおおうヴェールの表象に関する研究に取り組んでいたが、2005 年に上梓した『ヴェール／ファロス　真理への欲望をめぐる物語』において、18 世紀末にこの表象をめぐって大きな断裂が生じたことを明らかにすることができた。18 世紀末以前は、ヴェール（真理と認識主体の間に介在する点でメディアである）は真理を隠す遮蔽物であったが、それ以降は、ヴェールというメディアそのものが前景化してきた。この変動とほぼ同時期に、ラーヴァーターの観相学が爆発的に流行した。観相学は、心という内面が顔という表面に浮かびあがることを前提として、外面から内面を読むことを試みる術だった。顔は心をおおうヴェールであり、ヴェールという表層には深層が一義的に対応する、というのがラーヴァーターの観相学が前提にしていた図式である。表層の前景化と、観相学における表層と深層の対応とが、ほぼ同時期に表象の枠組みを作ったのはなぜかということが、問題として浮かび上がってきた。
③デスマスク：研究代表者は、2005 年 5 月 3 日に開催された日本独文学会春季研究発表会のシンポジウム「纏う、あるいは、〈本質〉から遠く離れて」において、「顔を纏う」というテーマの下、レッシング以降のデスマスクについて発表した。静止した顔面あるいは生動していた仮面としてのデスマスクは、それを眺める観察者が死者を神聖化することのできる空間への入り口である。観察者は、顔の所有者から視線を返されることなく、自由に観察を続けることができる。ラーヴァーターは『観相学断片』において死者の顔を「神の似姿」として賛美したが、これは、死者の顔やデスマスクこそが、観相学の対象として理想の条件を満たしていたからだ、というのが申請者が到達できた暫定的な結論だった。観相学者の特権的なポジションが考察の対象になってきた。
④歩行する観察者：日本独文学会機関誌『ドイツ文学：特集：群衆と観相学／群衆の観相学』130 号に掲載予定の『観察者の退位をめぐる四都物語』（15-29 頁）において、申請者は、観察主体としてのラーヴァーターがとっていた安定した「客観的」な視点が、18 世紀末の都市化の波のなかで、不安的になっていくプロセスを考察した。観察主体自身も観察され、観相学の「客観性」が問題化していくというのが、暫定的な結論だった。

２．研究の目的
①本研究は、観相学史をメディア論的な視点から捉えなおし、観相学から展開した犯罪学・人種学なども射程におさめ、18 世紀の後半から顕著になってきた表層の前景化が、20 世紀末には表層による内面形成力というエピステモロジカルな断裂として現象するプロセスを考察する点で、批判的観相学史をめざす。
②1995 年以降、観相学がドイツで研究対象となりはじめた。ドイツにおいて文化学が急速に制度化し、地歩を固めた時期である。学際的な観相学研究は一つのケース・スタディとなり、文化学が今後広がりを見せると思われる日本国内の文科系の学問のコンテンツの拡充に寄与するはずである。
③その一方で、本研究はラーヴァーター以降の観相学は学問化の欲望を常に秘めていたことにも着眼する。これによって、学問性という理念を相対化することができるだろう。伝統的な学問概念の歴史性を、観察主体の成立に着目しつつ、観相学から浮き彫りにしたい。

３．研究の方法
　ラーヴァーターの『観相学断片』全 4 巻の内在的な検討から始め、カールス、リヒテンベルクらによる受容を分析した後、フォン・マックスの画像や顔をモティーフとした様々な映画を分析し、最終的にラーヴァーターの観相学が胚胎していた問題点をレヴィナスのテクストを手がかりにして発掘する。

４．研究成果
　ラーヴァーターが『観相学断片』を執筆した目的の一つは、観相学を「学問」として確立することであり、そのためには観相学が「方法」を備えていることが必須だった。「観察」がその「方法」であった。言うまでもなく、ラーヴァーター以前の観相学も観察対象である顔を「観察」してきた。ただし、「観察」という行為そのものの重要性がことさらに強調されることはなく、「観察」は観相に先立つ自明の操作だった。ラーヴァーターは観相学を方法論的に基礎づける「観察」に「学問」性を確保するために、「観察」の客観性を求めた。観相する観察者と観相される観察対象とが視線を合わせないことが要件となる。観相される観察対象は一方的に「観察」されることが求められた。それは、観察対象である顔の持ち主が、自分が「観察」されていることをできるだけ自覚しないようにするということだ。観察者が観察対象に対して一方向的に視線を送ることができる、と信じられていたわけである。
　観察者のこのような特権的な位置をめぐっては、すでにクレーリーが『観察者の系譜視覚空間の変容とモダニティ』 の中で十全に考察している。本研究ではクレーリーの考察の枠組である観察者一般と観察対象一般を、観相学者と他者の顔に限定する。この限

定はしかし、クレーリーの結論を個別の具体的事例で再確認するためになされるのではない。特殊に顔が観察対象である場合、観察者自身が観察対象の位置に反転してしまうことは稀ではない 。顔を見る観察者は顔を見られる観察対象に逆転される可能性がつねにあるにもかかわらず、観相学者は見られない、と信じているようだ。ラーヴァーターは「見られない」という前提から出発したのではなく、「見られない」ようにつとめた。つまり、「見られる」可能性をなかば知りつつ、その可能性を排除しようとしたのである。その意味でクレーリーの用語である「観察者[Observer]」と区別して、以下では観相学者を「観察主体」と呼ぶことにする。観相学者の「主体[subject]」性は、眼前の観察対象が彼を見ていないか寝ているか死んでいるかの状態にあるという例外的な位置関係に従属しているからである。

ラーヴァーターの観相学の要諦は、「外面の表現というものは、要するにそこから内面を識るためにある」 という素朴な解釈学の図式である。ラーヴァーターはさらに、顔という外面と心という内面の対応を確言するのみならず、「道徳的に善であればあるほど美しく、道徳的に悪であればあるほど醜い」というテーゼをそこからすぐに導きだしてしまう。ラーヴァーターの観相学があれほど多くの読者を獲得し、ほぼ一世紀後には、ロンブローゾの生来犯罪人説を帰結したのは、それが単純な二項対立で構成されていたからである。外面と内面との間に複雑な関係が想定されていないからこそ、汎用性が高かったわけだ。

ラーヴァーターによれば、観察の客観性は、観察対象である人間が観察されていることを感知しないことによって保証される 。「観察されていることに気がついた人は、不機嫌になったり、うわべをよそおったりする」 。観察対象が観察されていることを意識しないためには、観察主体は透明でなければならない。観察対象が生身の人間である限り、これは不可能だ。いちばんいいのは、見られることを意識する主体にはなりえないような観察対象を選ぶことである。たとえば、メダルや彫像やスケッチされた顔である。描かれた観察対象ならば、観察主体が凝視してもいいし、「四方八方に向けてもいい」 。とはいえ、すべての人間の顔が彫像や絵として記録されているわけではなかった。ラーヴァーターの念頭に浮かんだ代替案は影絵だった。「観相学はその客観的な真実の証拠としては、この影絵よりも信頼でき論駁しようのないものをもたない」 と、ラーヴァーターは断言する。実際、ラーヴァーターは二万点以上の顔の図像を所有していた 。動くことのない無数の顔たちからなるコレクションの中へと、ラーヴァーターは入っていく。こちらを見ない死んだ顔たちのデータベースの中で、特権的に「一人になる[Ich gehe in die Einsamkeit.]」 ためである 。他者はいない。脱他者化された他者の痕跡が、一方的に観察する「主体」という境位を可能にする。

『観相学断片』の最終巻には、「国民と家系の観相学」と題された章がある。そこではほとんど唐突に、フエゴ諸島の原住民の顔と「もっとも賢くもっとも学識がありもっとも繊細でもっとも高貴な思想家の一人」の横顔のシルエットが「対比のために」 並置されている。この並置の恣意性は、ラーヴァーターが主張する「観察」の「学問」性と、奇妙な対比をなしている。一方において「学問」性が求められ、他方において差別のイデオロギーが剥き出しになっているという構図は、カールスの『人間の形態の象徴学』(1853)に継承される。カールスはラーヴァーターの観相学の「学問」性を高めるために、ラーヴァーターの観相学から、ひとりラーヴァーターにのみ許された「見者」としての能力を引き算し、「比較」と「計測」 や「計算」 という方法を導入した。そのような「学問」的操作によって確定され類型化された人間は、言うまでもなく他者ではない。「学問」的な操作は、迫ってくる他者たちから自己を守るための防衛機制のひとつである。迫ってくる他者とは、まずは都市に流入する人々を指すが、19 世紀の半ばには、それに加えて、それまで「人間」から截然と区別されていた、「人間」よりも「下」の動物も含まれるようになる。カールスの『人間の形態の象徴学』が発表されたほぼ五年後に、「人間の起源と歴史」に光があてられることを予見する書物が世に出た。ダーウィンの『種の起源』が人類の「素朴な自惚れに大きな侮辱」 を与える数年前に、「人間」が猿のみならず、人類として括られるはずの存在に対してすら、自分を差異化していたことを確認しておこう。観相学に関するカールスの著作には、ラーヴァーターのテクストよりも明確なかたちで、差別のイデオロギーと「学問」性が矛盾することなく同居して伏在しているという構図を見てとることができる。

未開人と自分を決定的に区別し、観察対象を無化したり、観察対象に対して「学問」的な操作によって決定的な距離を確保するラーヴァーターとカールスが観察主体として立ち上がった時代に、観察主体が確保される仕掛けを見抜いていたのがリヒテンベルクである。リヒテンベルクは、観察主体が観察対象を客観的に認識することができるという『観相学断片』の前提をおそらくは念頭に置きながら、ラーヴァーターの労作を批判する自分の動機を、「私は、より洗練された世界から粗雑な迷信が追放されたのだから、そ

の代わりに小ざかしい迷信が忍びこまないようにしたかった。このような迷信は、まさに理性の仮面をつけているために、粗雑な迷信よりもずっと危険である」 と説明する。対象が顔であれ身体全体であれ服装であれ、観相学のコンセプトは、表層のヴェールを剥がしその下に隠されていた本当の姿を剥き出しにすることだから、まさに啓蒙の時代に生まれるべくして生まれた「学問」だが、リヒテンベルクによればそれが新たな「迷信」を作り出す。認識論におけるこのような「迷信」の内容を、リヒテンベルクは『雑記張』のなかでアフォリズムのかたちで説明する。観察主体は観察対象のなかに自らを置き入れているのであって、両者の間には「客観性」を可能にするような断絶はない、とリヒテンベルクは考える。「世界は私たちによって認識されるためにあるのではなく、そのなかで私たちをつくるためにある」というアフォリズムは、ラーヴァーターの観相学における観察主体は観察対象と断絶していないばかりではなく、断絶していることを自明のこととすることで、あるいは断絶していると思い込むことで、観察主体としてつくられていくということを指摘している。

ラーヴァーターとカールスにおける観察主体の構築は、自分たちとは無関係に観察対象が自存しているという区別立てによって保証されたが、この区別立ては、未開人とヨーロッパの白人である自分たちとの間にも線を引いている。けれどもすぐさま、つまり19 世紀の半ばには、ダーウィンの進化論やフォン・マックスの活動によって、この区分線が消失し、観察主体の仮構性が表象としてあらわになる。1859 年に出版された『種の起源』では、「やがて人間の起源とその歴史についても光が当てられることだろう」 という予告が全巻の終わり近くに記されているだけで、ヒトの特権性はまだ掘り崩されていない。ヒトが「何らかの下等な種に由来することの証拠」 が提示されたのは、1871 年に発表された『人間の進化と性淘汰』においてである。観相学史のなかにとりあげられるダーウィンの『人及び動物の表情について』は、その翌年出版されたが、本来この『人間の進化と性淘汰』に組み込まれるはずの論考だった。『人及び動物の表情について』の結論部には、「表情の理論を研究することはある程度まで、ヒトが何らかの下等な動物の形態に由来するという結論を確証するということを我々は見てきた」 と記されている 。ラーヴァーターとカールスはその観相学において観察主体という透明な境位を暗黙のうちに設定することで、人間の特権性を確保した。そうすることでヒトは人間となった。ダーウィンの観相学では、まだ主題化はしていないものの、人間が自身を「下等な動物」と連続するヒトとして定位するようになる。このことを作品と実人生において体現したのが、画家のガブリエル・フォン・マックスである。マックスは、ダーウィンの影響下で進化論に強い関心を抱き、後にエルンスト・ヘッケルとも学術的な親交を結んだ。ヘッケルが人類と類人猿の間に入るはずのミッシングリンクを「ピテカントロプス・アラルス」、つまり「言葉のない猿人」と呼んだことはよく知られているが、彼の書斎の壁には、マックスの手になる『ピテカントロプス・アラルス』がかけられている 。マックスはダーウィニストである前に、なにもよりもまず画家であり、さらにコレクターであり心霊主義者でもあった。マックスのコレクションは「先史学」、「動物学と人類学」、「民族学」の三つのセクションに分かれているが 、膨大な数の石器や頭蓋骨とともに心霊写真も含まれている。生きた観察対象への距離感は、マックスと猿との関係から見てとることができる。マックスは 1870 年以降生涯にわたって複数の猿を飼育していた 。いや、猿と生活していた。妻および猿と共にする食事の風景は、写真として、さらにはマックス自身の手になる自画像として残されている。猿を飼う当初の目的はダーウィンからの刺激を受けて、霊長類を研究するためだった。それが対象への愛情へと昂じていった。ところがマックスは自分が抱擁していた猿が死ぬと、彼自身の手で、死んだ猿の毛を剃り、皮膚を剥ぎ、解剖した。そればかりか、死んだ猿を絵のモデルとしても利用した。『美術評論家』と題された作品では、かつてマックスが抱擁し観察した猿が、今や人の手になる絵を評定しているという構図になっている。観察対象が観察主体のポジションに移動しているわけだ。人間以外の動物たちを観察し、観察することで主体としての境位を確保してきた人間は、進化論によって観察対象と同一平面上に置かれることになったが、この推移を極端化し逆転して描いたのが『骸骨を前にした猿』である。猿はここでも観察対象から観察主体にいわば格上げされている。いや逆に、観察主体である人間は猿と同列に並べられる存在であって、いつでも観察対象に転位しかねない、と言うべきか。観察主体の座は揺れはじめる。猿のみならず、こちらを観察してこないことがあらかじめ約束されている死体を前にしても、だ。マックスの『解剖医』(1869) における観察主体としての男性の医者と観察対象としての女性の位置価は、人体解剖を論じる際に必ず引き合いに出されるレンブラントの『トゥルプ博士の解剖学講義』(1632) とそれを比較することでおおよそ確定することができる。『トゥルプ博士の解剖学講義』(1632) では、観察対象は死んだ人間であり、観察主体は当然のことだがまだ生きている

人間である。生死の区分が観察主体と観察対象の間に明確な境界線を引いている 。それに対しマックスの絵では、解剖学者は観察対象である女性の死体にメスをまだ入れておらず、観察ではなく目をつむって黙想しているように思われる。彼の右手は乳房の左斜め上の白い覆いに触れ、左手は自らの顎に当てられている。右手が暗示するエロスと左手が示唆する沈思とが共在している。メスを媒介としない接触は欲望の直接的な充足に向かう可能性を秘め、沈思は観察対象から自分に向けられる誘惑を防備するための仕草として読むこともできるだろう 。いずれにしても観察主体と観察対象の二項対立はほとんど無効になっている。解剖医はもはや観察主体ではなく、禁欲する観察者にすぎない。観察主体の没落は、マックスが『解剖学者』と同じく 1860 年代に書いたらしいカリカチュアに端的に表現されている。腹部をすでに開かれ剃髪された女性の死体が解剖台の上で起き上がり、解剖学者を驚愕させる姿が描かれている。観察者はもやは安んじて観察に専念できなくなってしまった。

マックスがヘッケルのために「言葉のない猿人」を制作したのとほぼ同じ頃、言葉のない人間の動きを記録することのできるメディアである映画が発明された。影絵であれ写真であれ、ラーヴァーターからロンブローゾに至るまで顔の観察主体が使った静止画と、暗闇のなかで流れる動画とは決定的に異なる。観察主体は静止画を前にして、自分のほうから安定した距離を確保しておくことができる。映画の場合は、スクリーンと観客との距離は物理的には一定であるが、心的な距離は一定しない。バラージュは顔のクローズ・アップを映画の特性の一つと考えた。ラーヴァーターたちの観相学は、観察対象の不安定な動きは、観察対象の本質に属さない恣意的な表情として排除していた。19 世紀の後半には観察主体の安定した座が揺れはじめたが、20 世紀に入ると観察対象もいわば主体的に動きはじめる。実際この頃、スクリーン上では顔がやむことなく増殖していた 。顔をめぐる観察主体と観察対象との関係を考察する上で、もっとも重要な映画が『顔のない眼』(1960) である。観察を回避し、観察を遮断し、観察を不可能にし、最後には観察主体の無力というよりも、観察主体の自己崩壊を描いた映画だ。若い娘たちの顔はここで、観察され、いわば品定めされるだけではない。影ではなく顔面そのものが、文字通り暴力的に剥ぎ取られる。ラーヴァーターの観相学において観察主体としての境位が内包していた暴力性は、このように観察主体が加工主体となることで剥き出しになる。一方、観察対象はあいかわらず受け身のままであるように思われる。娘たちは顔を盗まれるだけだからだ。けれども、醜く変形した顔だけでなく、仮面を装着した無表情な顔を見られることも避け、さらには、望まぬままに父親から文字通り他人の顔を移植されるクリスティアヌは、受け身の観察対象ないし加工対象でありながら、仮面から覗く彼女の眼は父親の行動を冷静に観察し、最終的には父親ジェヌシエが実験用に飼育していた犬たちを檻から解き放ち、犬たちが父親を殺害するにまかせる。顔による感情の表出が不可能なクリスティアヌは、行動によって感情を実現する。その結果、間接的ではあるが、観察加工主体は観察対象によって殺される。しかも、観察加工主体の営みが収斂していた身体部位である顔は、これまた観察対象であった実験動物に噛みちぎられるのだ。ここにはもはや、ラーヴァーターの観相学が前提にしていた観察主体と観察対象の安定的な距離感はない。観察主体が意のままにできる観察対象が背を向けたまま消えていく最後の場面は、20 世紀において観相学を成立せしめる前提が無効になったことを示している。

『顔のない眼』がモティーフとして顔を使っていたとすれば、その 8 年後に発表された『フェイシズ』は技法として顔のクローズ・アップを戦略的に多用する。顔がクローズ・アップされることで、内面の一義的な解釈と確定が困難になる。顔は、観察者があらかじめ設定している理解の枠組を逸脱するのだ。クローズ・アップされたまま動く顔を前にして、観察主体はかりそめに保持していた客観性や学問性という特権を剥奪され、見る者にもどり、さらには、驚く者、戸惑う者になることだろう。バラージュは、子供の死を悲しみながら微笑している女優の表情を思い出し、その微笑が実は悲しみの表現であることに気づいて愕然とする。観察主体であるバラージュが保持していた悲しみを表示する記号システムは、「突発」的に剥き出しになって「出現」する内面の感情を前にして、機能しなくなる。映画のなかの顔は、裸形になって、記号化を逃れるのだ。

レヴィナスは、対面する「〈他者〉の顔は、顔が私に残す、手でかたどることのできるイメージを不断に破壊し、それをあふれ出す」として、「〈他者〉の顔」が観察主体の把捉を逃れると説いていた。メタレベルで顔たちを分類し、顔の記号論を整備し、その都度対面する顔をコード表に照らし、その顔の持ち主の内面を忖度するという観相学者の夢は、ここに至って完全に打ち砕かれる。レヴィナスによれば、「私」に対面し、「私」に有無を言わせず迫ってくるこの「表象不可能」な「〈他者〉の顔」は、「〈無限者〉の様式」 である。観察対象の向こう側に神的な次元が開かれる。レヴィナスにとってこの神的な次元は、生者である「〈他者〉の顔」に現れる。それ

はたとえば、「悲惨さをつうじて私たちに訴えかける」 異邦人、寡婦、孤児の「顔」である。

改革派の牧師であったラーヴァーターにとっても、レヴィナスと同じように顔の向こう側に神的な次元が開かれた。ラーヴァーターは死にゆく人間の顔に「神の似姿が―朽ちていく廃墟の下から輝き出る」 のを見、「〈他者〉の顔」ならぬ死者の顔の向こう側に神の存在を確認する。だが、顔の向こう側に神的な次元が開かれるという構造的類同性よりも、むしろ、その顔が生者の顔なのか死者の顔なのかという相違にとどまらなければならない。ラーヴァーターの観相学はシルエットや横顔や貨幣に刻まれた顔を格好の対象としていた。レヴィナスの用語を使えば、ラーヴァーターは「遠近法」の「視点」に立っている観察主体である。「遠近法」の「視点」に立つ者がけっして「遠近法」の空間内に姿をあらわすことがないように、ラーヴァーターも、少なくとも本人の心づもりでは、見つめることに専念し目と化した透明な存在であって、その限りにおいて主体であることができた。見つめる者が主体となるためには、見つめられる他の人々は、見つめ返す他者ではなく、シルエットや横顔といった死者でなければならない。しかも文字通りの死者は、観察主体の読み込みを全面的に許容してくれる。ラーヴァーターが人の顔をめぐる解釈学を「学問」として構築する夢を見ることができたのは、レヴィナスの言葉を借りれば、「殺し」続けたからだ。「殺す」ために、ラーヴァーターは視線を合わせないで横顔のシルエットを盗み取る装置を使用した。観察対象と観察主体が向き合わないことで、観察対象からは他者性を剥離させることができたのである。

ラーヴァーターに対するこのような批判は、いささか手厳しすぎるようにも思われるし、レヴィナスにもたれかかった後知恵に見えるかもしれない。しかしながら、実は、ラーヴァーター自身もほかならぬ『観相学断片』の中で、レヴィナスを先取りするかのように、手短な自己批判を行っている。『観相学断片』の「観相学、一つの学問」と題された第 8 断片は、「コリント人への第一の手紙」第 13 章の大胆なパラフレーズで結ばれている。『聖書』からパラフレーズされないままに採用され、『観相学断片』にそのまま残存した「顔と顔とを合わせて見るだろう」という語句はは、あえてこの箇所とラーヴァーターのテクスト全体との整合性をつけるために解釈するならば、メディアの決定的な不在という観相学者の夢を示唆している。しかしながら、ラーヴァーターは事実上、「顔と顔とを合わせて見」なかった。他人の顔を観察し解釈する者は、この「顔と顔とを合わせて、見る」という構図を排除することで、観察の「学問」性を確保し、観察主体として自己特権化することができる。観察される人間と視線を合わせないでその横顔のシルエットを盗み取る装置は、「顔と顔とを合わせて見る」状況を回避するためのものである。ラーヴァーターによって回避されたこの構図が回復されるときのありようを、レヴィナスは「「さし向かいで」(vis-à-vis) という位置どりは、「～のかたわらに」の変容ではないからである。接続詞「と」によって、私が〈他者〉をもういちど私にむすびつけようとする場合であっても、〈他者〉は私に顔を向けつづけ、その顔においてみずから啓示しつづける」、と説明している。観察対象が観察主体を凝視していないとすれば、それは僥倖である。僥倖にすぎない。安定的な初期条件ではない 。もしこのことに思い至らなかったのがラーヴァーターだけでなかったとすれば、自己特権化する観察主体の夢は近代の夢であり、もしそのことを回避するテクノロジーがあいかわらず開発されつづけているとすれば、顔を特権的に観察する主体の夢はこれからもあいかわらず見つづけられるであろうし、そのことによって「〈他者〉の顔」はつねに隠蔽されたままのはずである 。

（本報告書ではレヴィナスの訳は熊野純彦による岩波文庫版を使用した）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

神尾達之、顔を見る／顔に見られる：観察主体の自立化と観察対象の脱他者化、学術研究（人文科学･社会科学編）、査読無、第 60 号、2012 年、印刷中

〔図書〕（計１件）

神尾達之、顔を纏う　―死の顔面、顔面の死―、大宮勘一郎他（編）『纏う―表層の戯れの彼方に』(水声社)、査読無、2007 年、93-160 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

神尾　達之（KAMIO TATSUYUKI）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：60152849